

「実践」が<理論>をコントロールするのであって、
<理論>が「実践」をコントロールするのではない
— ソーシャルワーカーが「《いま—ここ》における実践」に対する能力へ覚醒すること —

藤田 徹

Practice Controls Theory, not the Other Way around.
Social Workers Waking up to the Capacity for "Practice Here and Now "

FUJITA Toru

ソーシャルワーカーは、ソーシャルワーク実践を引き出すための根拠をどこに求めているのだろうか。それは、ソーシャルワーカー自身の頭の中に収められた「教科書＝理論・方法等」へ求められるものなのか。それとも、「教科書＝理論・方法等」をツールとしながら「《いま—ここ》における実践」のコンテキストに基づく率直な理解へ求めているのだろうか。つまり、ソーシャルワークの展開において「理論が実践をコントロールするのか、それとも実践が理論をコントロールするのか」、これが本論の見極めるべき課題である。

キーワード：状況的行為 理論と実践のかい離 いま—ここ 見られているが気づかれていない

The major point of this task that I want to describe is as follows. Where do social workers look for the grounds for drawing social work practice? Are they something that social workers can find in the "theories, methods, etc." stored in their own heads? Or do they look for them in a plain understanding based on the context of "practice <<here and now >>," while using "theories, methods, etc." as a tool? In other words, "whether theories control practice or the other way around" is the question whose answer should be determined here.

Keywords : situated actions gap between theories and practices now and here seen-but-unnoticed

I. 「その実践」の根拠とは・・・

ソーシャルワーカーは、ソーシャルワーク実践（「どうするのか」）を引き出すための根拠をどこに求めているのだろうか。それは、ソーシャルワーカー自身によって修得された「教科書＝理論・方法等」¹へ求められるものなのか。それとも、「教科書＝理論・方法等」を活用しつつも、その眼前で展開される「《いま－ここ》における実践」のコンテクストに基づく率直な判断へ求めているのだろうか。つまり、ソーシャルワークの展開をめぐる「理論が実践をコントロールする」のか、それとも「実践が理論をコントロールする」のか、これらを見極めることが本論の課題である。

ここで、本課題への一つの見通しを示しておきたい。まず、たとえ「教科書＝理論・方法等」に基づく数多くのモデルやアプローチを身につけたとしても、また、数百のソーシャルワーク実践事例から共通の知識法則を明らかにできたとしても、おそらく、それらのことだけから「《いま－ここ》における実践」で求められる妥当なソーシャルワークを引き出すことは困難である。なぜならば、「《いま－ここ》における実践」は、クライアントのあり方、それに対峙するソーシャルワーカーのあり方、また、それが展開される実践の多様な条件（周辺環境や物質資源等）を含め、激しく流転するはずである。それに対する「教科書＝理論・方法等」あるいは抽出された知識法則は情報として限られた部分を賄うに過ぎず、ソーシャルワークの「《いま－ここ》における実践」に対する正答の根拠とすることはできないからである。そして、この見通しに基づき、本論は「実践が理論をコントロールする」ことを立場として展開を進めたいと思う。

さて、些か唐突だが「ロボット研究」をめぐる動向から、本課題のイメージを増幅させておきたい。上野・西阪（2000）によれば、伝統的なロボットは、作動に必要なプログラム（記号的表象）を内蔵させ、そのプログラムが環境構造へ「何段階にもわたる事象の処理を行った」（2000, p.51）すえの「解」に基づき作動する設計が施されている。しかし、このロボットの仕組みでは、作動対象である環境構造の変化へ追いつくことができない。なぜならば、環境構造は無限に移り変わり、それに滞りなく対応するには、それへ追いつくためのプログラムのアップグ

レードを無限に繰り返さなければならなくなるからである。しかし、これは道理に合う話ではない。

それに対して「状況的ロボティクス」という発想に基づくロボットは、作動に対する環境構造への情報処理を内部のプログラムに担わせるのではなく、ロボットの内蔵センサー（知覚系）が移り行く環境構造をその都度情報としてキャッチし、それをアクチュエータ（駆動系）へ直接伝達することで環境構造に適した作動を実現する。その仕組み自体は単純だが、環境構造への適用能力は極めて高いロボットであると言われている。

作り手の想定した範囲内で設計された、言わば、架空のプログラムによって現実の環境構造をコントロールすることに限界を抱える伝統的なロボットと、逆に、環境構造を作動システムの前提とすることによって、よりスムーズな動きを実現する状況的ロボットは、極めて対照的な発想に基づく設計といえよう。つまり、環境構造をプログラムによって処理し尽くそうとするのか、それとも環境構造そのものを作動システムへ組み入れるのか。これは、上記のソーシャルワーク実践の根拠をめぐる課題と似ていることがわかる。

「教科書＝理論・方法等」というプログラムを根拠とするからこそ、適切なソーシャルワークが実現できるのか、それとも「《いま－ここ》における実践」の展開を踏まえつつ対応するからこそ、ソーシャルワークは適切なものとなるのか。それを見定める手続きを以下に進めたい。

II. なぜ、ソーシャルワーカーは自立しなければならないのか？

「なぜ、ソーシャルワーカーは自立しなければならないのか？」とは、本課題をソーシャルワークの「《いま－ここ》における実践」において熟考するための橋頭堡としての問いである。しかし、実は、この問いの立て方は正確ではない。正しくは「なぜ、ソーシャルワーカーは自立していることへ気づかなければならないのか？」となる。つまり、ソーシャルワーカーが、もうすでにソーシャルワーク実践を自力で構築しているにもかかわらず、そのことへの自覚が希薄であること²によって生じる混乱がある。これは、それらを見極めることを意図とした問いである。

さて、ソーシャルワーカーは、養成教育等を経て修得したはずの「教科書＝理論・方法等」という専門能力へ何を期待しているのだろうか。これまでの養成教育のあり方を踏まえると、ソーシャルワーカーは「教科書＝理論・方法等」が根拠となりあるいは目標となり、自らの実践を導いてくれるものと素朴に思い描いているのではないだろうか。たとえば「これから先、どのようにしたらいいのか手探り状態であるからこそ、自分を導いてくれる知、自分より前にあって動いていく現実³に追いついていくことができる知をソーシャルワーカーは必要としている」³（須藤, 2009, p.36）、あるいは「現場のソーシャルワーク実践は、ソーシャルワーカーが常に意識化しなくても現在まで発展してきたソーシャルワーク理論のうえに成り立っているといえよう。」（南本, 2016, p.214）という元ならびに現役のベテラン・ソーシャルワーカーによる言説も、それらに対する素朴な期待を裏づけるものといえよう。

しかし、これは、必ずしも実態にそぐうものではない。なぜならば、「I.」で触れたように、「教科書＝理論・方法等」の抽象的特徴が、「《いま－ここ》における実践」に対する妥当なソーシャルワークを引き出す根拠とすることを妨げるからである。また、そもそも「教科書＝理論・方法等」がソーシャルワーク実践の根拠であるためには、事前にそれらがその実践に対する根拠であることの正当化が担保されなければならない。しかし、それによると、その根拠を正当化するための別の根拠を必要とし、さらには、その別の根拠も同様に正当化できなければならず、結局、根拠に対する正当化の無限後退へ陥ることになる。つまり、「教科書＝理論・方法等」をその実践の根拠とすることがいつまでたっても叶わない事態が引き起こされる。そして、だからこそソーシャルワーカーは、自らが「自立していること」へ気づく必要がある。そのことの重要性を改めて提起したい。

この提起は、これまでのソーシャルワーク研究が目指し続けているところと大きく食い違うものである。基本的にソーシャルワーク研究は、「ソーシャルワークとは何か」という問題意識に対して「教科書＝理論・方法等」としてのモデルやアプローチを持って応答しようとしている。しかし本来、この問題意識は、ソーシャルワーク実践の当事者である

ソーシャルワーカーにとっての切実な場面から発せられるものである。つまり、「ソーシャルワークとは何か」という問題意識は、ソーシャルワーカーがその目の前のクライアントに対する妥当な実践としての一手をいかに導くか、という極めて現実的な課題へ向けられているはずである。改めて、ソーシャルワーク研究による「教科書＝理論・方法等」の目指すところとソーシャルワーク実践の課題が、大きな齟齬を抱えていることへ気づかされる。このことにより、これまでのソーシャルワーク研究は、ソーシャルワーカーがどのようにソーシャルワーク実践を組織しているのか、その実態を描く試みとして失敗し続けているといえよう。

もちろん、ソーシャルワーク研究が積み上げた「教科書＝理論・方法等」を空言として貶めるつもりはない。それ自体、ソーシャルワーク研究百有余年の歴史が積み重ねた成果であり、金字塔である。しかし、だからこそソーシャルワーク実践が「教科書＝理論・方法等」によって決定されるのではなく、ソーシャルワーカー自身の能力と行動において達成されていること、つまり「自立していること」への気づきが求められるのである。なぜならば、その気づきがあるからこそ「教科書＝理論・方法等」を、妥当なソーシャルワークを達成するための“ツール”であることが確認され、そしてだからこそ、それらの本当の活用の仕方を明らかにすることが可能となるからである。

しかし、「教科書＝理論・方法等」を根拠としないソーシャルワーク実践に対して、その妥当性を疑う見方がある。これまでのソーシャルワーク研究は「教科書＝理論・方法等」がソーシャルワークを導く前提であり、かつ最善の実践のための指針であり、それを踏まええない実践は、科学的根拠の希薄な「勘と経験」を頼りとする「職人芸の域」（岡本, 2010, p.7）にある取り組みに過ぎない、という見方が根強くある。しかし実は、この見方こそソーシャルワーク実践を混乱へ導く要因の一つとなっている。繰り返すように、普遍化、一般化に基づく「教科書＝理論・方法等」は、ソーシャルワークの「《いま－ここ》における実践」としての固有の条件（文脈表示性）をそぎ落とした理論化を特徴とする。それに対して、ソーシャルワーク実践の舞台となる日常生活は、限りなく文脈依存的な取り組みを特徴と

している。つまり、それぞれの特徴の根本的な食い違いを不問とし、「教科書＝理論・方法等」をソーシャルワーク実践の根拠へ据えることにこそ混乱の要因が求められる。

さて、ソーシャルワークの「理論と実践のかい離」が叫ばれる中、「科学的根拠の希薄な」実践、つまり、日常的に様々な現場で繰り返されるソーシャルワーク実践は、本当に混沌とした実践なのであろうか。もしそれが事実であるとすれば、各所で取り組まれているソーシャルワーク実践があらゆるところで滞りをみせることになるはずだ。しかし、それが背理であるとするれば、それぞれの実践が、それなりの秩序を持って取り組まれている証左となっている。それは「教科書＝理論・方法等」を根拠とせずとも、それぞれが一致した方法と共通理解によってソーシャルワーク実践が成立していること、つまりソーシャルワーカー自身の手によって「自立していること」を物語っている。そうであるとすれば、われわれは、それらの実践自体から、改めて「ソーシャルワーク」を学ぶ相当な理由があることへ気づくべきではないだろうか。

Ⅲ. ソーシャルワーク研究が抱える“距離感”

それでは、これまでのソーシャルワーク研究は「理論」と「実践」の関係をどのように取り扱ってきたのだろうか。たとえば、平塚は「理論と実践は1つの対をなす。理論と実践は、両翼の位置にあり、両者は相互に関係し合い、影響し合いながら循環的に発展を遂げるもの」（平塚, 2016, はじめに）と、両者の関係を並列的に描こうとしている。しかし、従来のソーシャルワーク研究のあり方からすると、この設定には、やはり無理があるように思う。「Ⅱ.」でも触れたように、「理論」が「実践」を先導するというテーゼに立ち、これまでのソーシャルワーク研究は進められてきたはずである。そして、このことは「援助である営みを科学的な裏づけや論拠をもって責任性のある対応ができるようにしていこう」ということが、従来の勘や経験に頼って、あるいはその人の天分や才能に依拠するようなやり方ではなくて、責任を持った対応をするためには、科学的裏づけが必要だ」（岡本, 2007, p.27）との指摘にもあるように、ソーシャルワークの置かれた特殊事情が大きな影響を与えてきた。しかしその一方で、こ

の両者は常に問題含みの関係であることもまた事実といえよう。それが「理論と実践のかい離」という積年の課題を指している。なぜ、ソーシャルワーク研究において「理論」と「実践」は、一方では求め、もう一方では反目する関係へ追い込まれてしまうのだろうか。

この課題に対して、岡本は「これまでの演繹的な研究方法や実践のあり方」（2010, p.13）を改め、「ソーシャルワークの実践活動の系統的、体系的情報の集積を持続的に実施し、その中から共通する所見や経験法則を抽出していくような、いわゆる帰納法的な研究と実践を展開していく必要」（2010, p.14）を強く提起している。おそらく、岡本の意図は「演繹的な研究方法」がソーシャルワーク実践と直接対峙せず、その実践の頭越して理論構築がなされることへの危機感にあり、「帰納法的な研究」によるソーシャルワーク実践が展開される現場で「系統的、体系的情報の集積」と「その中から共通の所見や経験法則を抽出」するからこそ実践と連動した理論構築が可能となり、結果、「理論と実践のかい離」の解消へ繋がることを期待しているように思う。

確かに、ソーシャルワーク実践は、「いまここ」における実践」として常に一回限りの行為の繰り返しであり、そこで用いられた、いわゆる＜実践知＞は、それが極めて有効な知であったとしても、他のソーシャルワーカーと共有することは叶わず、そのソーシャルワーカーのひとつの経験へ埋没することになる。だからこそ「この知を掘り起こし外在化、客体化させる」（平塚, 2016, p.42）ことが重要であり、それが「帰納法的な研究」によって成し遂げられるとする“思い”に対する一定の共感はできる。

しかし、もし「理論と実践のかい離」の解消を目指すのであれば、岡本の提起には大きな問題が含まれている。なぜならば、「演繹的な研究方法」によるソーシャルワーク実践の頭越しからの理論構築を嫌い、「帰納法的な研究」を選択するのであれば、それがソーシャルワーク実践に対して、いかなるポジションを取るのかが極めて重要なポイントとなる。しかし、岡本の示すアプローチが、たとえ数多くのソーシャルワークの実践事例を積み重ねた取り組みであったとしても、それらの実践を「系統的、体系的に」束ねて、「法則性や新たな経験法則を抽

出」するという手続きを取る限り、結局、ひとつひとつの事例にやどる「いまここ」における実践」の特徴（文脈表示性）を切り捨てる点において、岡本が嫌った「演繹的な研究方法」と同様の手続きと結論へ導くことになる。ソーシャルワークに対してその実践とは別次元、つまり、その実践の＜外側＞から持ち込まれた枠組みによって理論構築を目指すやり方において、両研究方法は同じ立場に置くことができる。

さて、この提起の限界は、ソーシャルワーク研究の第一人者である岡本をもってしても、ソーシャルワークの「いまここ」における実践」を射程へ収めることの困難さを示している。また、この限界は、改めてソーシャルワーク研究全体への課題として捉える直すことができる。

たとえば、空閑は、ソーシャルワーカーが求められる能力について「生活、人生、日々の暮らし、価値観や思い、家族、地域など、クライアントとの環境へのかかわりのなかで、あるいはそのかかわりをふり返ることで、クライアントの『微細なシグナル』である言語、非言語による訴えに気づく力、そしてその人らしさや、独自性を発見する力であろう。ソーシャルワーカーにはクライアントが生きる日常の生活世界のリアリティへの敏感さが必要」（空閑, 2012, p.8）と説明している。おそらく、これらはソーシャルワーカーの持つべき能力に対する説明の一般的な記述として妥当なものだろう。

しかし、ここで説明される能力を実際のソーシャルワーク実践へ当てはめて考えるとき、果たしてこの内容からソーシャルワーカーは、目の前のクライアントに対する具体的な実践＝「どうするのか」を引き出すことは可能だろうか。特に、説明としての＜気づく＞＜発見する＞＜敏感さ＞という記述において、具体的な「どうするのか」を引き出すことは困難である。例えば、＜気づく＞とは、「どうする」ことが＜気づく＞ことになるのか、＜発見する＞とは、「どうする」ことが＜発見する＞ことになるのか、それらを担保するための具体的な方法や手続きについての説明が欠けている。つまり、このことに限らずソーシャルワーク研究は、上記のように「どうすべきか」（what）は語れても、「どうするのか」（how）について、ほとんど語るができない。それを方法的に言い直せば、ソーシャルワークの「＜

いまここ」における実践」をその＜外側＞から語ることはできても、その＜内側＞から語ることを自らの手段として持ち合わせていない。

また、岡本は、これまでのソーシャルワーク研究について「周辺諸科学の動向に敏感であること」（2010, p.9）への評価を与えつつも、それが「利用者にとって有効であれば、いかなる科学でも無差別に節操もなく、ありとあらゆる知見や理論あるいは諸科学の法則や所見を導入・採用・応用して援助のための有効性と使用価値が最優先されること」（2010, p.11）へ警鐘を鳴らしている。その上で「ソーシャルワークの内なる世界から内生的、自生的なモデルの産出」（2010, p.10）の必要性を強く訴えている。

ここで岡本は、単に「隣接諸科学の法則や所見」を応用すること自体を問題視しているのではなく、ソーシャルワーク研究と周辺諸科学の関係が、真に「援助のための有効性と使用価値」へ繋がらないことへの憂慮を訴えているのではないだろうか。つまり、根拠のない「さまざまなモデルやアプローチが百花繚乱のごとく登場すること」（2010, p.11）によってソーシャルワーク研究および実践へ与える混乱への危惧へ置かれているように思う。しかし、この混乱も元をただせば「どうすべきか」は語れても「どうするのか」を語ることのできないソーシャルワーク研究そのものが抱える限界に根差している。もし周辺諸科学の法則に基づくモデルやアプローチが持ち込まれたとしても、ソーシャルワーク研究が「いまここ」における実践」での「どうするのか」を提起できるとすれば、同時に、それらの手段としての効果の見極めも可能になるはずである。「どうすべきか」としか提案できないからこそ、根拠も定かではない周辺諸科学からのモデルやアプローチがソーシャルワーク研究へ軽々と持ち込まれることになるのではないだろうか。

さて、「どうすべきか」は語れても「どうするのか」を語れないソーシャルワーク研究が抱える問題は、何も周辺諸科学のみに限ったことではない。それは大本のソーシャルワーク研究の成果である「教科書＝理論・方法等」においても同様の課題を露呈させてしまう。実は、これまでソーシャルワーク研究が築き上げた「教科書＝理論・方法等」として説明されるモデルやアプローチ等に対して、実際

のソーシャルワーク実践の詳細な記述から、それらが「〈いま－ここ〉における実践」に対していかなる役割を果たすものなのか、という比較や検証が行われることがほとんどなかった。もちろん、それは「どうすべきか」を語れても「どうするのか」を語れないソーシャルワーク研究の方法論的限界ゆえに、である。そうであるとすれば、現在のソーシャルワーク研究における「教科書＝理論・方法等」がソーシャルワーク実践を導くものとして位置づけられる根拠は、それを実践と比較する方法も習慣も欠いていることを前提としていることになる。そういう意味では、ソーシャルワーク研究の積年の課題とされる「理論と実践のかい離」の“かい離”があるからこそ、現在の「教科書＝理論・方法等」はその正当性を与えられているものと、実は、言い得てしまうのである。つまり、「教科書＝理論・方法等」が「どうすべきか」という次元へ置かれ続ける限り、「理論と実践のかい離」の解消はありえないことになる。それこそが、ソーシャルワーク実践に対する現状のソーシャルワーク研究が抱える根本的な“距離感”を現している。

Ⅳ. 「状況的行為」としてのソーシャルワーク

岡本による「帰納法的な研究」等の提起は、紛れもなくソーシャルワーク研究の「理論と実践のかい離」という課題へ向けたひとつの試みといえよう。また、昨今の「帰納法的な研究」に属するナラティブ・アプローチ、グラウンデッドセオリー・アプローチ、現象学的アプローチなどのソーシャルワーク研究への積極的な導入も同様の流れと見ることができ。ここで、それぞれのアプローチの“距離感”を埋める試み、つまり「どうするのか」を見極める効果をひとつひとつ検証すること⁴はしないが、これらも岡本の提起における限界同様「その実践の〈外側〉から持ち込まれた枠組みで理論構築を目指すやり方」という点において、共通している。

では、「どうするのか」を語るためにソーシャルワーク研究は、どのような前提に立つ必要があるのだろうか。まず、何よりも肝要なのは、ソーシャルワーク研究がこだわり続けている「理論は実践の前提」とする原則を手放すことである。そして、「プランは、本来的にはアドホックな活動に対してたかだが弱いリソース（資源）である」⁵（サッチマン、

1999, p. iii）とするヒューマン・インタフェース研究の第一人者であるルーシー・A・サッチマンの率直すぎる提起をひとまず受け入れてみることである。

サッチマン(1999)は、まず、ひとびとの実践を「本来的に状況に埋め込まれたものであり、状況に埋め込まれた行為は本質的にアドホック（その都度的な）なもの」(p. iii) であるとして、それを「状況的行為」として定義づけている。それに対するプランは「行為をもっともらしく説明する先行条件と行為の結果の形式化と見な」(p. iii) し、「それ自体は状況的行為の実際のコースを決定もしなければ、適切に再構成もしない」(p.3) ものとして、これまでの認知科学の中心に置かれてきた「プランはあらゆるレベルで、行為の前提条件でもあり、行為の処方箋でもある」(p.27) という立場、いわゆる「プラン論」を綿密な議論に基づき退けている。

その理由として、状況的行為は常に「その場の環境（周辺環境）に依存したインタラクション」(p.28) であり、いかなるプランであってもそのようなアドホックな行為の先行きを予想し、その展開を決定する力を持つことはできないという。サッチマンは、そのことを「急流を下るカヌー」(p.51) を例に説明している。カヌーで急流を下る場合、人は、事前に下り方のプランを立てるかもしれない。しかし、いくら詳細なプランが用意されていたとしても、実際に下り始めてみると、その周辺環境である岩場の子想外の位置や急流の思わぬ方向に応じたパドリングを必要とするなどその人の身体化されたあらゆる能力を用いてそれらを乗り越えていかなければならなくなる。そしてその瞬間、おそらく、用意されていた詳細なプランは捨て去られているはずである。このことにより、サッチマンは、「プラン」によって「行為」が決定されるものではないことを簡潔に説明している。

さらに、状況的行為は「行為者間の、または行為者と行為が行われる環境の間の時々刻々のインタラクションを通して立ち現れる」(p.171) 実践であり、それらの仕組みと特徴を踏まえたとき、プランは、その状況的行為のリソースであり、常にその行為との関係において意味合いの見極めが必要であることを合わせて強調している。つまり、サッチマンにとって、一般論としてのプランが問題なのではなく、そ

れらが用いられるローカルな時間と空間において、プランの、それぞれが文脈依存的に適切に機能することこそが重要なのである。サッチマンは、それが「プラン」と「状況的行為」における適切な関係と仕組みであることを指し示している。

さて、この関係について、さらに専門的な「援助」という場面へ置き換えて、改めて、検討を進める。ここでは「心」に関する概念の論理文法分析を医療・看護場面へ適用する前田(2008)の取り組みから学びたい。前田は、ともすれば抽象的に扱われる援助方法としての「傾聴」や「共感」等を、具体的な医療・看護場面（ロールプレイを含め）における「実践の秩序」(p.86) として、それらの実態的な展開を明らかにしていく。援助場面による援助方法がその効果を持って適切に遂行されるためには、それらが専門職者（看護師）と利用者（患者）双方の理解可能性を担保する「公的な基準」(p.90) を満たすことが必要である、としている。つまり、専門職者と利用者双方の「概念の論理文法に則った」(p.123) 実践としての発話や表現が会話のシークエンスとして「状況に埋め込まれている」(p.104) からこそ、それは援助として成立すると説明している。例えば、専門職者が「助言者であること」を実現するには、安易な「共感」や「同調」は避けなければならない。なぜならば、「少なくとも適切な助言がなされるまでは、相談者の発話は助言をなすための資源であることが期待されており、単なる同調はこの期待に反する可能性が」(p.131) 生じるからである。つまり、「傾聴」場面で繰り返し交わされる「質問」に対する「返答」へいちいち専門職者からの「共感」や「同調」が行われるとすれば、利用者の「返答」をひととおり聴くからこそ、その上での「助言」がそれとして担保される仕組みである援助活動へ水を差すことになり、却って「助言者であること」の失敗へつながる可能性を、前田は指摘している。これらの記述から、援助（状況的行為）というものが、援助方法（「プラン」あるいは「理論」）をもって自動的に引き出される訳ではなく、専門職者と利用者双方にとって理解できる「公的な基準」を満たすように、かつ、その都度その都度、つまり「〈いま－ここ〉における実践」において、援助方法をリソースとして、ツールとしつつ、達成しなければならない至極当前の仕組みに基づく実践であることが、改めて確

認されている。

以上のように、サッチマンあるいは前田による提起は、ソーシャルワーク研究の“距離感”をめぐる課題に対する大きなヒントを与えている。しかし、繰り返すように、ソーシャルワーク研究の「教科書＝理論・方法等」に対する信奉は根強い。逆に「教科書＝理論・方法等」が実践とかい離していることへの声があがればあがるほど、「理論が実践をコントロールしなければならぬ」という観念への固執が強まる感さえある。

改めて立ち戻るべきは、ソーシャルワークがクライアントの利益のためにあり、それを担わなければならないソーシャルワーカーのためにあるということだ。だからこそソーシャルワーク研究は、ソーシャルワークが「〈いま－ここ〉における実践」として、でたらしめに行われているわけではなく、一定の仕組みに沿って展開されている実践であることをソーシャルワーカーのみならず、クライアントにも、さらには第三者にも理解できる形で提示する責任がある。それは、援助する側、される側という権力関係が生じやすいソーシャルワーク実践が、常識に照らして、ソーシャルワーカーとクライアント双方にとっても妥当な実践であることが何よりも証明されねばならない事情からである。

Ⅴ. 「〈いま－ここ〉における実践」に対する“まなざし”

さて、これまでの議論において、ソーシャルワーカー自身においても、ソーシャルワーク研究においても、ソーシャルワークの実際、つまり「〈いま－ここ〉における実践」としてのソーシャルワークが取り逃がされてきたことを確認した。

特に、ソーシャルワーカーにおいては、日々「〈いま－ここ〉における実践」へ向き合い、その積み重ねとしてのソーシャルワークを実現していながら、それに対する「日常的な実践を素朴に自明視」する「見られているが気づかれていない（seen-but-unnoticed）」意識⁶によって、それ自体へ気づけない状態に置かれてしまう。そして、その意識が「教科書＝理論・方法等」に対する的外れな期待を抱かせてしまうことへ結びついている。

また、ソーシャルワーク研究においては、「教科書＝理論・方法等」がソーシャルワーク実践の根拠

あるいは原因であるとの思い込みから、逆に、それ自体がどのように用いられてソーシャルワーク実践が成し遂げられるのかを、研究課題とすることを妨げてしまっている。

つまり、両者において、「等身大」としてのソーシャルワークをつかみ損ねた状態に立たされている。この課題は、当然、ソーシャルワーク研究がその責任の多くを負わなければならない。それは、ソーシャルワーカーそれ自身の輩出の使命を養成教育が担い、その内容を担保することがソーシャルワーク研究の役割であることから引き出される当然の責務である。

そうであるとすれば、ソーシャルワーク研究は、「その実践の〈外側〉から持ち込まれた枠組みで理論構築を目指すやり方」の限界を受けとめ、ソーシャルワークをその〈内側〉から、つまり、「〈いまここ〉における実践」に対する「課題」として、また、ソーシャルワーカーにとっては、それらに対する「能力」において、しっかりと対峙する研究姿勢を持つことが何よりも必要であると言えるだろう。それが、「実践が理論をコントロールするのであって、理論が実践をコントロールするのではない」という題目の意図するところである。

注

- 1 「教科書＝理論・方法等」という表記は、社会福祉研究・ソーシャルワーク研究の究極の目標が社会福祉に関する課題の解消、ニーズの充足に置かれるとするならば、それを担う専門職養成にこそ、それらの研究成果の粋が集められているという前提から、それらを養成校で専門能力として修得する範囲を「教科書」とし、その内容の代表を「理論・方法等」として説明している。また、文脈によって「理論」のみの表記もあるが、「教科書＝理論・方法等」と同意とする。
- 2 ソーシャルワーカーが自ら加担したソーシャルワーク実践でありながら、その加担の事実へ容易に気づくことのできない理由については、藤田（2015）第3章 4）を参照。
- 3 確かに須藤は、「教科書＝理論・方法等」（＝須藤の言う「理論」）を根拠とするソーシャルワーク観の誤謬に気づいている。しかし一方で、

ソーシャルワークが、ソーシャルワーカーの積極的な判断と行動によって構築される実践であることへの理解が明確ではなく、ソーシャルワーカーの「体験や経験、勘そしてセンス」の効果を主張できても、実践における「体験や経験、勘そしてセンス」の実像を捉えきれずに、結果的にそれらに対して須藤自身が嫌った「理論」と同じ位置づけを与えてしまっている。詳細については、杉本・須藤・岡田（2009）chapter 2を参照。

- 4 ナラティブ・アプローチに対する批判は、藤田（2015）第3章 6）を、グラウンデッドセオリー・アプローチに対する批判は、藤田（2015）第4章 5）をそれぞれ参照。
- 5 これ以降、サッチマンの解釈（サッチマン，1999，p. ii）を踏まえて、「プラン」と「理論」を、「状況的行為」と「実践」を同意として扱い説明を進める。
- 6 「見られているが気づかれていない（seen-but-unnoticed）」意識とソーシャルワークとの関係については、藤田編著（2016）第1章 IIを参照。

引用文献

- 藤田徹 2015 エスノメソドロジカル・ソーシャルワーク―「手続論的転回」と「気づきのメソッド」の類似性へ寄せて― プイツーソリユーション 星雲社
- 平塚良子 2010 ソーシャルワークという科学という課題 岡本民夫・平塚良子編 新しいソーシャルワークの展開 ミネルヴァ書房
- 平塚良子 2016 はじめに 岡本民夫監修 ソーシャルワークの理論と実践―その循環的發展を目指して― 中央法規
- 平塚良子 2016 ソーシャルワークの科学という課題 岡本民夫監修 ソーシャルワークの理論と実践―その循環的發展を目指して― 中央法規
- 空閑浩人 2012 ソーシャルワーカーとその実践を支える「知」の形成 空閑浩人編 2012 ソーシャルワーカー論：「かかわり続ける専門職」のアイデンティティ ミネルヴァ書房
- 前田泰樹 2008 心の技法 医療実践の社会学 新曜社

「実践」が〈理論〉をコントロールするのであって、〈理論〉が「実践」をコントロールするのではない―ソーシャルワーカーが「〈いまここ〉における実践」に対する能力へ覚醒すること―

- 南本宣子 2016 保健医療領域におけるソーシャルワーク実践 岡本民夫監修 ソーシャルワークの理論と実践―その循環的發展を目指して― 中央法規
- 岡本民夫 2007 ソーシャルワークにおける科学化を問う 社会福祉実践理論研究 第16号
- 岡本民夫 2010 ソーシャルワークの新しい展開 岡本民夫・平塚良子編 新しいソーシャルワークの展開 ミネルヴァ書房
- 須藤八千代 2009 ソーシャルワークを導く知 杉本貴代栄・須藤八千代・岡田朋子編著 ソーシャルワーカーの仕事と生活 福祉の現場で働くということ 学陽書房
- Suchman,L.A 1987 PLANS AND SITUATED ACTIONS Cambridge University Press（ルーシー・

- A・サッチマン 佐伯胖監（訳）1999 プランと状況的行為 人間―機械コミュニケーションの可能性 産業図書）
- 上野直樹・西阪仰 2000 インタラクシオン人工知能と心 大修館書店

参考文献

- 藤田徹編著 2016 多角的な研究アプローチによる現代福祉課題の検証 プイツーソリユーション 星雲社
- 前田泰樹・水川喜史・岡田光弘編 2007 エスノメソドロジー 人々の実践から学ぶ 新曜社
- 上野直樹編 2000 状況のインターフェース 金子書房